

令和1年度

大阪大学

文学研究科・文学部 インターンシップ報告書

編集・発行

大阪大学 文学研究科・文学部
教育支援室

560-8532 大阪府豊中市待兼山町 1-5

令和元年7月

令和1年度

大阪大学

文学研究科・文学部 インターンシップ報告書

編集・発行

大阪大学 文学研究科・文学部
教育支援室

560-8532 大阪府豊中市待兼山町 1-5
令和元年7月

目次

はじめに・・・・・・・・教育支援室インターンシップ専門委員（文学研究科准教授）	古後 奈緒子	1
演劇学インターンシップ概要・・・・・・・・文学研究科教授	永田 靖	2
ピッコロシアターインターンシップ報告書・・・・・・・・文学部人文学科	佐藤 知果	4
ピッコロシアター劇場制作研修・・・・・・・・文学部人文学科	児玉 桃香	9
演劇学演習「ピッコロシアター劇場制作研修」報告書・・・・・・・・文学部人文学科	宅美 明香里	12
音楽学インターンシップ概要・・・・・・・・文学研究科教授	伊東 信宏	15
音楽ホールインターンシップ報告書・・・・・・・・文学部人文学科	今井 静香・古澤 舞子	16
京都コンサートホールインターンシップ報告・・・・・・・・文学研究科博士前期課程	音田 真陽・佐藤 馨	21

はじめに

本報告書は、令和元（2019）年度に大阪大学文学部および大学院文学研究科で行われたインターンシップ、ならびにその準備や事後指導を行っている授業について報告したものである。実習先・人数は以下のとおりである。

○兵庫県立尼崎青少年創造劇場（演劇学）	学部生 3名
○あいおいニッセイ同和火災ザ・フェニックスホール（音楽学）	学部生 2名
○住友生命いずみホール（音楽学）	学部生 1名 大学院生 1名
○京都コンサートホール（音楽学）	大学院生 2名
○国立国際美術館（西洋美術史）	大学院生 1名

報告書を読むと、インターンシップに参加した学生にとって、実習先での体験がかけがえのないものであったことが読み取れる。学生たちを迎えて指導してくださっている受け入れ諸機関の方々に、この場を借りて、心よりお礼を申し上げる。

文学部・文学研究科としての報告書のとりまとめは平成 16 年度から始まるが、関連授業が毎年開講され、現在のような体制となったのは平成 18 年度である。平成 18～令和元年度の 13 年間に、音楽・演劇・美術・映画の各方面のインターンシップが行われてきた。ただし映画関係は、26 年度末に担当教員が定年退職したため、現在は開講されていない。参考のために、18～29 年度にインターンシップに参加した学生数を掲げておく。

	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	計
音楽	5	3	4	2	4	6	6	3	3	3	3	6	0	6	54
演劇	4	4	4	3	2	6	2	4	3	0	3	6	0	3	44
美術	0	0	0	2	2	1	1	1	0	0	0	2	2	1	12
映画	1	0	1	0	0	0	1	4	0	-	-	-	-	-	7
小計	10	7	9	7	8	13	10	12	6	3	6	14	2	10	117

（単位修得を目的とせず、インターンシップに参加した学生の数を含む）

教育支援室インターンシップ専門委員（文学研究科准教授） 古後 奈緒子

演劇学インターンシップ概要

兵庫県立尼崎青少年創造劇場（ピッコロ劇場）劇場制作演習

演劇学研究室 永田 靖

概要

演劇学研究室では、授業「劇場制作演習」の一環として、兵庫県立尼崎青少年創造劇場の協力のもと、劇場制作についての研修を行っている。2019年度は、兵庫県立ピッコロ劇団第65回公演『ブルーストッキングの女たち』（宮本研作、稲葉賀恵演出）を題材に、10月2日から10月5日にかけて実施した。

目的

「劇場制作演習」では、公立劇場での公演のリハーサル、ゲネプロ、初日を制作として研修することで、演劇上演の現場に触れながら、以下の諸点を学ぶ。①どのようなプロセスで演劇作品が初日を迎えるか。②（事前に学習しておいた）作品がどのように現実的に解釈され、物理的な諸条件（俳優の個性、劇場の規模、予算規模など）によってどのように細部が決まってしまうか。③稽古最終日（ゲネプロ）と初日の本質的な違いは何か。④観客は作品をどのように受け取っていたか。⑤ピッコロ劇場は演劇作品をどのようなものと考え、どのようなものとして観客に提供しようとしているか。

これらのことを体験的に学ぶことで、ピッコロ劇場が地域社会にとってどのような働きをしているかを考察し、同時に広く演劇一般と劇場の持つ今日的な意義と課題について理解とビジョンを持つことを目的としている。

授業の進め方

年度当初にピッコロ劇場側と研修を実施する公演や日程、おおよその研修内容について相談し、1学期中には学生に案内する。その上で、まず研修受講生に対してオリエンテーションを行う。9月下旬に実施したオリエンテーションでは、授業担当者（永田）が受講生に対して、ピッコロ劇場の創設の趣旨、特色、現在の活動状況について簡単に説明した上で、今回の作品と原作者、演出家、劇団の特徴を解説する。同時に今回の研修についての必要な心構えについて述べ、授業の狙いと何を主題として研修を受けるべきかを理解して貰う。

10月2日の演劇学後期授業「観劇実習」において、今回の上演作品である『ブルーストッキングの女たち』についての作品分析を行った。ここで研修生以外の学生はこの演習を受けて作品理解を深め、10月5日の上演を観劇する。

研修を受講する学生は、10月2日から実際にピッコロ劇場において研修を受ける。仕事の内容は、いわゆる「表方」の制作面での仕事を行う。広報、観客席廻り、ゲネの手伝い、観客受入準備とその対応、上演後の片付けなど様々であるが、併設するピッコロ演劇学校の授業参観やスタッフのレクチャーも受ける。その後、10月5日の上演には場内整理として客入れを担当する。それらを通して演劇公演という「出来事性」についてその一回性、反復性、約束性、社交性について認識を深める。

観劇と研修終了後に、授業「演劇学演習」において、インターンでの経験について、劇場の概要、作品の特徴、劇団の方向性などについて簡単に報告し、ディスカッションを行う。制作者の立場から見た演劇上演と、観客の立場から見た演劇上演との違いについて、相互に議論し、上演作品の芸術的特徴が、立場の違いによっていかに異なったものとしてあるのかを理解する。

成績評価

最終的に、インターンシップ参加者全員はインターンについての報告書を、それ以外の観劇者（学生）は観劇レポートを執筆する。授業担当者（永田）はそれらによって成績評価を行い、インターンシップについての報告書は完成した後に、劇場側に提供し、劇場の活動のために役立ててもらおう。

謝辞

今年度もピッコロ劇場制作部の皆さんには大変お世話になりました。お陰様で有意義な研修になりました。受講生は皆充実した研修であったことに大変満足しております。次年度も何とぞよろしくお願い致します。

ピッコロシアターインターンシップ報告書

大阪大学文学部

演劇学専修 学部 4 年

佐藤 知果

【1 日目】

初日ということでまずは演劇学研究室 0B である新倉さんはじめ、広報交流専門員の古川さん、劇団部の部長でいらっしゃる田窪さんに、ピッコロシアター内の施設、そしてその生い立ち、劇団設立の経緯について、それから公立劇場としてのピッコロシアターの役割や、劇団を持つ意義についてお話を伺った。

ピッコロシアターは、大中小ホール、さらに練習室や資料室、展示室を有している劇場で、特に貸館の方は非常に人気で、使用する一年前から予約をしても満杯といった状況であるようだ。練習室は「創造的活動であれば」借りることができ、資料室には演劇はじめ、映画や児童書、高校演劇のオリジナル台本までたくさんの資料が収められていた。ピッコロシアターは 41 年前に建てられた当初から、「アマチュアのための劇場」というコンセプトで現在まで至っているという。大ホールの客席は 400 席弱で、あまり大きくなく、逆に舞台自体は演じる側がゆったりと使えるように大きなものになっている。また、入り口から事務室、舞台に至るまでが一続きになっており、段差などもなくバリアフリーな作りになっている。それに対して、観客側はまず大ホールに向かうまでに高い階段を登らなければならないし、客席は非常に高低差のあるもので、バリアフリーとはかけ離れた構造になっている。つまりこれは「観る人よりも演じる人のための劇場」となっているということらしく、建設当初から建設検討委員会を開き、演劇人にヒアリングをして、その実際を図面に落とし込んだ結果であるということだった。その際に、劇作のための資料室が欲しいという意見も出され、現在もある資料室が設置されることになった。これは、ピッコロシアター建設当初からどこに軸を置いてこの劇場を作るのかというのがはっきりと定められていたから成せたことだったようだ。当時の兵庫県知事が、この公立劇場の運営は公務員ではできないとして、毎日ホールのプロデューサーを務めていた山根敏子氏を引き抜き、館長に据え、その山根氏が、この最大 400 人弱の動員数の劇場をいかに運営していくかという問題に、様々な側面から取り組んだという。それはトークショーや寄席などを開いたり、演劇学校、そして劇団を作ったりという方法だ。開館 5 周年で演劇を学ぶ場としての学校を立ち上げ、続いて技術学校も創始した。しかし、そのままではせっかく育成した人材が東京へ流れてしまう、という考えから、地域の文化リーダーが根付くための劇団が作られた。それが現ピッコロ劇団である。ピッコロシアターは公立劇場であるため、「地域交流」を重視しており、そのためにも「県立劇団」の存在が重要だという。その背景には東京一極集中の加速もあり、地域の価値観や空気を共有し、

かつ震災など、非常事態が起こった際に継続的な支援を続けることのできる存在として、「地域のアーティスト」が必要なのではないか、ということも田窪さんは仰っていた。人々が共同して作ること、人と人との交流を意識した活動を重視するならば、劇場は土地に固定されているが、劇団は外に出て行き繋げる役割を果たすという。特に小学校へ出張公演である「おでかけステージ」や中学生を招待して公演する「わくわくステージ」などは我々インターン生含めて議論になった。というのも、それらの公演は生徒全員が経済的な格差や興味の有る無しに関わらず参加し観劇する機会となるからだ。今後の演劇理解の土台となるような経験に、どのような演目がふさわしいのか、果たして「傷跡を残さない」演目をするに意味はあるのか、対して「公立劇団」としての演目の選び方、など様々な意見が飛び交った。現段階でピッコロシアターとしては、芸術・演劇的なところよりも、地域に根ざした方向性を重視して行きたいということで、前衛的なものを上演する方向性は取っていないということだった。また、国の助成を受けるためにも、ワークショップなどの活動が重視されていて、そういったワークショップの効果をデータ・数値化することで演劇やその技術・手法に対する理解を得る努力をしているところだということだった。学校における上演や演劇教育については二日目に再び触れられることとなった。

【2日目】

2日目は、まずチラシ折り込みの作業があった。初めての作業であったため、かなり最初は手こずったが、徐々に慣れ、単純作業に感情が無と化した。今後はどんなに邪魔だと思っても、チラシをすぐに捨てることはしないだろうと思う。

その後、新倉さんの卒業後の仕事の変遷などを聞き、公立劇場の採用の現状などの話をした。それから演劇学研究室OBでもある尾西さんに話を伺った。尾西さんは修士で教育と演劇について研究をしたということで、現在もピッコロシアターでは演劇教育専門員を務めていらっしゃる方だ。なぜ初等教育に音楽と技術（図工）は組み込まれているのに演劇はないのか、演劇教育はどうして歴史の浅いのか、という問いでは、当時の工場労働者を作るための構造と、大政翼賛的な一致団結の青少年を育成するための国の方針があげられた。演劇は個性を伸ばすものであり、言うなれば出る杭を育むものである。よって、出る杭を打ち込みたい政府は、特に文部大臣はこれを禁じたという背景がある、とのことだった。例えば、体育の授業では体育座りをさせられるが、これも声が出なくて動きにくくなるような、身体的な特徴を捉えた体勢ということも仰っていた。「生の監獄」なる教育のために、演劇が排除され、かつフーコーが述べているような、身体的特徴を使った人間制御の構図があったこと、そして未だに残っていることを思い知らされた。

この日の最後には場当たりを見学させていただき、場当たりの中で様々に細かな演出が変更されていく様子を見ることができた。プレヒト幕の交差するタイミングや、出る位置や立ち位置、

動きの緩急など、細かな指示が加えられて行き、本番の上演でどのようなものになるのか、翌日への期待が高まった。

【3日目】

3日目は、まず古川さんに「シアターアクセシビリティ」に対してのピッコロシアターでの取り組みについてお話しいただいた。視覚障害や聴覚障害の方々に対する企画だけではなく、幼い子供連れや、多動の子供連れも観劇しやすくするために、ガラス貼りの親子室を設けたりなど、ユニバーサルな劇場作りに挑戦しているようだった。というのも、古川さんは広報の担当員であったが、公演や劇場の存在意義のPRをするのが仕事だ。こうした新しい取り組みに挑戦することによって、メディアに取り上げられたりなど、劇場の存在意義を作り出すことにもつながるといふ。こういった取り組みは視覚障害者向けの企画から始まった。それは演劇上演に際して音声ガイドをつけるという取り組みだったらしい。最初はガイドを付けるという取り組みそのものに対する関心が一番強かったが、徐々に内容の方にも関心が持たれ始め、役者による、イメージを重視したガイドへと変わっていったという。2017年には聴覚障害者向けの手話通訳・要約筆記付きの上演をし、江守徹を呼び、トークショーを開催したらしいが、聴覚障害の方々はどうやら江守徹を知らなかったようで、これはあまり成功しなかった。そこで、ヒアリングをおこなったところ、マジックショーや、セリフのない劇の方が好まれることが発覚した。そうして、その後聴覚障害者向けに、マイムカンパニーによる上演が行われた。こうした取り組みは、新聞によって、それからテレビによって取り上げられ、さらに「ひょうごユニバーサル社会づくり賞」に応募した結果、受賞した。2018年には来場者は半分に減っているが、結果として口コミによって通常の上演に来場する人が増えたという。このような取り組みを始めた当初は、今すぐ取り組むべきか、ニーズはあるのか、またその企画で芸術性は担保できるのかなどという問題が浮上し、議論となったが、平成24年に劇場と音楽堂の活性化を推進する劇場法が、また平成30年には障害者による文化芸術活動の推進に関する法律が制定されていることもあり、本取り組みは今すぐ取り組まれるべきものであり、かつ、公立劇場は劇場に来ない人、つまり芝居が好きな人だけではなく、県民、国民のすべてに思いを馳せるべきものであり、潜在的ニーズに目を向ける視点が必要だということで、取り組みは開始された。これらの話から、公共劇場たるピッコロシアターの「劇場の存在意義」を作り出す広報という役割の具体的な側面を知ることができた。

その後は、チケットもぎりとチラシ渡しの仕事をして、いよいよ観劇となった。今報告書では観劇に関する報告は割愛するものとする。

【4日目】

最終日は、まず田房さんによるお話から始まった。田房さんからは、劇場という存在と、営業、

そして「シアタースタート」について聞くことができた。まず、劇場としては「客がいてこそ」成り立つもの、ということが大前提であって、そのためには広報が重要である。また、同じ理由で営業も重要となり、営業先としては、労演などの観客団体、学校、町内会などがあるそうだ。小学校に赴いて上演する「おでかけステージ」や中学生を招待して上演する「わくわくステージ」に関しては初日に聞いた内容であったが、ここでもこういった内容をそれぞれの年代に見せるべきかという話題でちょっとした議論になった。田房さん自身としては「ハードルは高く、間口は広く」という信条のもと、幼くなればなるほど一流を見せるべきという考えを持っているようだった。というのも、演劇というものがそもそも「理解」するものなのか？というところがあるからだ。言葉以外で「分かってもらおう」ということが大事であることがたくさんあり、「理解」というよりも「感じること」が必要である、と田房さんは言う。そしてそういった文脈が「シアタースタート」という取り組みにつながっていくことになったのだ、と知ることができた。「ベイビードラマ」というものはヨーロッパで20年前に始まったもので、九州では劇団風の子などがいち早く手がけていたものらしい。そういった試みは赤ちゃんの新鮮な感性が演劇的にも必要なのではないか、という考えから、注目され始めており、そのような取り組みをピッコロシアターでもしようということで立ち上がったのが「シアタースタート」という企画だ。具体的には、コンパクトで安く、上演しやすいということによって人形劇の形式をとっているらしい。ポスターなどでも子供向けを前面に押し出し、かつ無料ではなくあえて有料にすることによって観客である親子に、お金を払って選んで観に来てもらうという「演劇体験」を意図しているということだった。8ヶ月の赤ちゃんが、人間の感性のピークだということがわかっており、赤ちゃんに対する演劇を作ることによって「説明を引き算すること」の重要性に、また、身体やその表現、音楽、表情、急な音などが効果的であることなどに気づきはじめたという。赤ちゃん側に演劇体験の基礎を作るだけでなく、赤ちゃんに対する演劇そのものから演劇側が学ぶことは多い、という話だった。

最後は、ピッコロ演劇学校の代表であり、劇作家、俳優である岩松了さんの授業を体験させていただいた。この日は翌日にある授業のための導入、という感じで、ある種の言葉遊びを通じて演劇の作り方の一端を学ぶ授業だった。言葉には言葉のバックグラウンド、つまり状況があり、それによって成立するものだという。言葉の言葉そのものの意味ではなく、「含み」が演劇的な要素になる。今回の授業では、具体的にはまず、シチュエーションとなる時、場を定め、何をしたかという語り口で人生の中で聞いた言葉を説明する。なるべく面白い方がいいが、面白くするためには言葉自体は意外なもの、つまり、「え？」といったような普通なら取り沙汰されないような言葉が望ましい。これがなかなか難しく、というのも何気ない言葉だからこそあまり印象に残っていないし、そういうところにアンテナを張って、劇作家は過ごしているのだな、と感じた。いよいよインターンも終わりを迎えたが、最後に新倉さんが話をしにきてくださった。『ブルー

『ストッキングの女たち』が2年前に本公演企画として採択された経緯を教えていただき、かつ上演の感想を言い合った。他には、海外公演が過去には盛んだったことや、今は「県のため」という意識の方が強いこと、サポートクラブについてなど、残された細々とした疑問に答えていただいた。職員さんがたの帰宅時間をとうに過ぎていたが、真摯に向き合って話をしてくれた新倉さんには、この四日間本当にお世話になった。

この四日間のインターンを通して、公立劇場の現場ではどういった思いや考えが持たれ、実際にどのようなプロセスが経られて具現化に至っているのか、またその過程にどういったしがらみがあり、どのように克服しているのか、ということ身を以て知ることができた。ピッコロシアターにはピッコロシアターのやり方がある。公立劇場としてのピッコロシアターがどのような存在であり続けるのか、そしてこれからもどのように変化していくのか、そのことに注目していきたい。

ピッコロシアター劇場制作研修

大阪大学文学部人文学科演劇学専攻

B3 児玉 桃香

研修先：兵庫県立尼崎ピッコロシアター

研修期間：10月2日～5日

概要：公共劇場の舞台制作にインターンとして参加し、舞台芸術の制作の実際を体験的に学ぶ。ピッコロ劇団第65回公演『ブルーストッキングの女たち』の上演を制作として研修する。制作の様々な仕事を研修しながら、上演作品の最終的な段階をつぶさに観察し、ゲネプロから本番を迎えるまでを体験的に学習する。

【1日目】

まず、大阪大学の演劇学研究室のOGである新倉さんに研修内容の説明とピッコロシアターの施設概要についてのお話をしていただいた。新倉さんは三つある部署（業務部、管理部、劇団部）のうち現在は劇団部に在籍されている。施設の現状としては、ピッコロシアターは兵庫県芸術文化協会という財団の指定管理下にあり、公共施設として県民、国民に認められるためどのようにあるべきかという問題や作品の芸術性を保ちながらも観客にとって間口の広い作品を作らなければならない難しさがあった。そして広い館内を見学させていただいた。

次に、広報交流専門員の古川さんにピッコロシアター創設時のお話をして頂いた。そのお話によるとピッコロシアターの劇場は徹底してアマチュアのユーザー目線で作られているのだという。特に大劇場は舞台が広く袖口にもゆとりがあるためユーザーは舞台の大きさに制限されることなく創作に励むことができる。そして、外の駐車場から舞台裏までの動線は完全にバリアフリーで、非常に搬入がしやすい作りになっている。また400席という席数も多すぎず少なすぎずで丁度いい。まさに「演じる人のための劇場」と言える。しかし、逆に観客にとってはバリアフリーではない作りになっている。そこが今後の課題であるという。また、文学座との繋がりが深いのは、創設時に文学座の公演の大阪拠点であった毎日ホールから山根さんという女性を館長として招いたことに由来しているそうだ。そして、現在の事務概要についてのお話もいただいた。特に社会包摂の強化、推進には力を入れており、児童・生徒対象のワークショップの拡充、企業との連携、障害のある方への鑑賞機会の充実、東北演劇人との交流の継続などに力を注がれているそうだ。

次にピッコロ劇団についてのお話が制作担当の田窪さんからあった。県が劇団を抱える必要はあるのか、県立劇団の意味とは、という問いに対し、地域のコミュニケーションの場となって

ほしいとおっしゃった。そして、全国でもその先駆けとなっているピッコロ劇団はその方法を全国で共有していくべきだと考えられていた。

1日目の最後にはピッコロシアターの舞台技術学校の授業を見学させていただいた。音響、舞台美術、照明に分かれての授業だったが、私が特に興味深かったのは舞台美術の授業で、生徒さんが考えてこられた舞台美術案も目をみはる斬新なものばかりだったし、それに対する先生方の意見の切り口も鋭く、とても勉強になった。

【2日目】

2日目はチラシの折り込みをしながら制作のお仕事を体験させてもらい、「ブルーストッキングの女たち」の場当たり見学もさせていただいた。また、新倉さんと同じく演劇学研究室の卒業生である尾西さんのお話も聞いた。

チラシの折り込みは普段私が所属劇団でしているものとは量が比べ物にならず、大人数でやっても2、3時間かかった。長い時には6時間かかることもあるというので、精神的にも体力的にも大変なお仕事だと思った。

場当たりは舞台転換のシーンで、こうして転換を何度も練習しておくことで本番でもスムーズに舞台を進行することができるのだと感心した。また、舞台の裏にたくさんのスタッフさんが控えていらっやあって、舞台上で見れるのは役者さんだけだけれどたくさん見えない人の支えがあって舞台は成り立っているのだと再確認できた。

尾西さんからは日本の演劇教育のお話を伺った。研究室でも研究されている先輩がいらっややることもあって以前から興味があったのでとても面白かった。やはり日本の演劇教育は遅れているけれど、ピッコロシアターの演劇学校の事業のお話も含めてそれを変えていきたいという職員さんたちの気持ちがひしひしと伝わってきた。

【3日目】

3日目はまず古川さんに「おでかけステージ」や「わくわくステージ」、「ファミリー劇場」のお話を伺った。これらの取り組みはまさに地域と劇団をつなぐものでもあり、幼少期からの演劇教育の一環である。お話の中で私は、学芸会などで演劇を作る側になったことのある子供に、「大人が本気で作る作品を見せること」に大きな意味があるのではないかと感じた。

そして、夕方の公演の接客業務をして観劇させていただいた。接客業務ではチケットのもぎりをした。職員さんの動き方を見ていると、困っていそうなお客様に声かけをするなど、居心地の良い劇場づくりが徹底されていると感じた。

【4日目】

4日目はまず田房さんという方にシアタースタートについてのお話を伺った。シアタースタートとは0～3歳児を対象にした演劇作品を提供するという試みである。「赤ちゃんに演劇が理解できるのか」という問いに対する田房さんの「そもそも演劇って理解するものなのか」という言葉が印象に残っている。人間の感受性が一生のうちで最高潮になる幼児期に演劇を「感じる」ことには大きな意味があると感じた。そして、お話の中で田房さんがおっしゃった「間口は広く、ハードルは高く」という言葉も印象深い。子供にも理解できる芝居にするべきだけれど、その質は下げないというプロとしての意識を感じた。

そしてまた夕方の公演の接客業務をし、そのあとに演劇学校の岩松了先生の特別講義を見学させていただいた。特別講義では記憶に残っている言葉をあげ、その言葉の意味が背景にある事柄によって変化する、つまり言葉は状況に支えられているということを体感した。

【四日間を通して】

四日間を通して学んだことはたくさんあったが、特に長年考えてきた間口の広い演劇とはどういうものかについての考えを深めることができた。ターゲットの年齢層、外国人への字幕補助、障がい者への鑑賞補助などこれからも考えていくべきことはたくさんあるが、ピッコロシアターが実際に行なっている活動に非常に刺激を受けた。

四日間たくさんのお話をさせていただき、たくさんの貴重な経験をさせていただき本当にありがとうございました。

演劇学演習「ピッコロシアター劇場制作研修」報告書

文学部人文学科 演劇学専修

3年 宅美 明香里

10月2日から5日までの4日間、兵庫県立尼崎青少年創造劇場ピッコロシアターにて行われた劇場制作インターンシップに参加した。

【1日目】

新倉さんによる研修説明、館内見学、古川さんによるピッコロシアター設立経緯の説明、田窪さんによるピッコロ劇団の活動や役割の説明、舞台技術学校の授業見学を行った。

ピッコロシアターはアマチュアの演じ手の立場に立って作られている。大ホールでも客席数は約400と少なく、その代わり舞台や幕裏のスペースが広い。大ホールが1階にあるため、大道具の搬入がしやすくなっている。検討委員会がターゲットとなる人々の意見を聞き、図面に落とし込んだからだそうだ。公立の劇場として存続していくためには一般の利用者にも使用し続けてもらうことが必要だが、ターゲットを明確にすることでうまく機能しており貸出も多い。公立の劇場、劇団は全国的に見てもかなり希であり、その役割は地方に演劇活動を普及すること、劇場に「出かけ」させられる「広場」になることであると学んだ。ピッコロシアターは、小学校に向いて公演を行うおでかけステージ、中学生に公演を観に来てもらうわくわくステージという取り組みを行っている。私は、子どもたちに半強制的に観劇をさせることは必要だと考えていたため、この取り組みに興味を持った。経済格差や家庭環境、元々の興味の有無によって観劇経験に大きな差が生じるのは不公平であるし、演劇が好きかどうかは観劇してみないことにはわからない。その点、小・中学校にコンタクトが取りやすく、地域に根ざしたきめ細やかな演劇普及活動ができるところが、公立劇団の強みであり役割である。劇場に来ることを通して新たなコミュニティを作るよう促し、劇場が社会の網の目からこぼれ落ちてしまう人々のセーフティネットとなるという話は以前平田オリザ先生から伺った。ピッコロ劇場は、0～3才児とその親を対象としたシアタースタート、外国人向けのワークショップ等の取り組みを行い、幅広い年代、状況の人の「広場」になろうとしている。実際の活動で「広場」を実現しようとしている姿勢は高く評価して良いのではないかと感じた。普段劇場に来ない人達を来させるための説得材料を作ることがアートマネジメントであるが、そのために結果を数字として出さなければいけない点が難しいと感じた。ただ演劇は有効だと叫ぶだけでは、普段演劇を見ない人、劇場に来ない人には届かない。短期で変化を劇的に表すことは難しいけれど、何かしら結果を数字で出さないと活動するための助成金が得られないのである。公立であるが故に自由に活動できないことも在るのではないかと考えた。

【2日目】

制作業務としてチラシの挟み込み作業、尾西さんによる演劇教育に関するお話、『ブルーストッキングの女たち』場当たり見学を行った。尾西さんからは、日本に演劇を用いた教育がないのは上に逆らうようないわゆる左翼的な人々を作らないようにするためだという話を伺い、無意識のうちに思想を制限されていた歴史に衝撃を受けた。しかしこれは過去の話ではないことが、未だに演劇が積極的に教育に取り入れられておらず、あいちトリエンナーレの助成金問題にも表れている。本当の精神の自由、表現の自由とは何かについて考えさせられた。また、演劇を教育に取り入れようにも指導できる人材がいなくカリキュラムもないため、海外の学校の授業やピッコロ劇団が小学校で行っているようなワークショップの内容を具体的に取り入れることはもちろん、まずは指導者の育成が必要であり、道のりの長さを感じた。

【3日目】

古川さんによる視聴覚障害者の観劇サポートの説明、制作業務体験として『ブルーストッキングの女』17時公演の受付業務、上演の鑑賞を行った。公演への来場者は関係者、年配の方が中心で、サポートクラブの会員もご高齢の方が多いそうだ。劇場として様々な取り組みを行っているとはいえ、若い層に届いているとはいいがたい厳しい現実を目の当たりにした。

観劇サポートに関して、音声ガイドを実況中継のように、リアルタイムで行うところが新鮮に感じ、他の劇場や演目はどのようにになっているのか興味を持った。古川さんの名刺には点字が入っており、劇場スタッフの中には手話を学んでいる人もいるという。来場したお客様に演劇を楽しんでもらうためには設備などのハードの面を整えるだけでは足りず、そこで働く人の姿勢や対応の方法を変えることも必要である。

本公演は劇団員や職員が演目を出し合って決め、今回上演された『ブルーストッキングの女たち』は劇団員の希望により上演が実現した。仕事にも恋愛にも食欲に生きる女性たちを通して、現代に生きる私たちはどうなのかと問いかけている作品のように感じる一方、現状を変えようとあがいても法律や政府、上を変えないと根本的な解決にはならないと大杉が唱えていたことは現代社会への風刺、皮肉の役割を果たしていたのではないかと思った。

【4日目】

田房さんによるシアタースタートの説明、公演の受け付け業務、演劇学校の岩松了さんの講義の見学を行った。絵本や読み聞かせが昔から好きな自分にとって、シアタースタートの演目はおもしろくとても興味が持てた。幼児向けの本や音楽のコンサートがあるのと同様に、幼児向けの演劇公演があってもおかしくはない。ベイビードラマという分野があり、アーティストがいることを初めて知った。またシアタースタートを行うにあたって、料金や客席の作り方など、赤ちゃん

だけでなく親にとっても見やすく楽しめる方法を考えているという。演目は幼児向けであるが、それを通して劇場に足を運んでもらうという、広場性を最も感じる取り組みであった。

岩松先生の講義では、印象的だった言葉を一つ出し、それがどのような状況で発せられたものなのかを説明するというワークショップのようなものを行った。一つの言葉の説明に長い時間を要し、言葉は言葉だけでは成り立たず、コンテキスト、人、発された背景によって成り立つものだとすることを、実例を用いて実感できた。次の日が実践の授業であったため物足りなさはあったものの、演劇サークルで役者をやっていたこともあり興味深いお話を伺うことができた。

全体のまとめとして

ピッコロシアターの取り組みは評価できる一方、公立ならではの問題として、どんな活動にも助成金を打ち切られないようにという考えが根底にあることもまた事実であった。5年間の助成金支給が終わったとき、その考えがなくとも社会のニーズをくみ取り、実践していけるかどうかは今後の課題となるのであろう。また、助成金についてや他の公立の文化施設がどのような取り組みを行っているのか関心を持つきっかけとなった。

インターンシップを通して、自分はアートマネジメント、地域と演劇の関わりに興味があるのだということが分かった。私は今まで授業で利賀での演劇やとやま世界こども舞台芸術祭等、地元である富山県での演劇、芸術活動について調べた。文化の東京一極集中が未だ根強い中、富山県にはこのような活動があるが、知名度は高いとはまだ言えずもっと良さを活かす方法があるのではないかと漠然とではあるが考えている。県が積極的に演劇、芸術に関わっているという点は、ピッコロシアターと共通する。インターンで得た知識や情報を今後の研究や将来に活かしたい。また、一緒に参加した佐藤さん、肖くん、児玉さんと、上演や演劇と社会の状況について議論し合い、同世代で同じ演劇学を学ぶ人達が何を考えているのかを知れたことが刺激的であり、普段自分がどれだけ何も考えずにいたのかを痛感させられた。自分の現状を見直し、将来の選択肢を増やすきっかけとなる、非常に実りのある4日間であった。

インターンシップ概要

文学研究科教授 伊東 信宏

音楽に関係するインターンシップは、今回、いずみホール、ザ・フェニックスホール、京都コンサートホールの3館に受け入れを承諾していただき、6名の学生・院生について実施した。いずみホール、ザ・フェニックスホールについては、基本的に学部3回生を対象とし、京都コンサートホールについては同ホールからの希望により大学院1年生を対象としているが、今年は例外的にいずみホールに大学院博士前期課程2年の近くにも参加してもらった（これは昨年度インターンシップが実施できなかったことと関係している）。以下にはザ・フェニックスホール、および京都コンサートホールでのインターンシップについてのみ、受講生からの報告を掲載する。

インターンシップ関連の出来事を時系列に即してここにまとめておく。

- ◆ 4月「音楽学演習」（前期）の開講に伴い、インターンシップの受講者を募集した。学部3回生3人、院生3人について派遣先を仮決定。
- ◆ 2019年10月24日（木）～26日（土）の3日間、ザ・フェニックスホールでのインターンシップ実施。
- ◆ 2019年11月18日（月）～11月22日（金）の5日間、いずみホールでのインターンシップ実施。
- ◆ 2019年11月27日（水）～29日（金）の3日間、京都コンサートホールでのインターンシップ実施。
- ◆ 2020年1月21日（火）、上記3つのインターンシップについて、音楽学研究室の総合演習において、受講者6名が報告。
- ◆ その後、報告書の内容について受講生と調整した。

今回も、充実したプログラムを用意して受け入れていただいていた3館のスタッフの方々に深くお礼を申し上げます。

音楽ホールインターンシップ報告書

大阪大学文学部人文学科音楽学専修
学部 3 回 今井 静香・古澤 舞子

【研修先】

あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール

【研修期間】

2019 年 10 月 24 日（木）～10 月 26 日（土）

【ホール概要】

所在地：大阪市北区西天満 4-15-10

開館：1995 年 5 月 13 日

席数：1 階 168 席、2 階 133 席 合計 301 席（最大 335 席）

構造：乾式浮き構造

【研修最終日の公演】

公演名：注目アーティストシリーズ 71

伊東信宏企画・構成

土と挑発：郷古廉&加藤洋之 デュオリサイタル

公演日時：2019 年 10 月 26 日（土） 15:00 開演／14:30 開場

会場：あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール

入場料：一般 3,500 円、学生 1,000 円

出演者：郷古廉（ヴァイオリン）

加藤洋之（ピアノ）

【研修内容】

第 1 日 10 月 24 日（木）午前 9 時～午後 5 時

- 1 ホール職員紹介（全体朝礼）
- 2 ザ・フェニックスホールの概要
- 3 ホール内案内・機械室等
- 4 貸館事業、貸館受付、インフォメーション制作
- 5 機関紙「サロン」について

6 自主企画事業、企画・公演広報

第2日 10月25日（金）午前9時～午後5時

- 1 著作権・友の会について
- 2 チケット業務について
- 3 ホームページについて
- 4 チラシ挟み込み作業
- 5 リハーサル見学

第3日 10月26日（土）午前9時～午後7時

- 1 ホール内準備、リハーサル見学、開場見学
- 2 公演本番・裏方見学、終演後対応
- 3 アフタートーク

【研修内容詳細】

〈第1日〉

まず全体朝礼に出席し、職員の方とインターン生それぞれの挨拶と自己紹介が行われた。

その後、支配人からザ・フェニックスホールの概要についての説明を受けた。ザ・フェニックスホールは旧同和火災（現あいおいニッセイ同和損保）の創立50周年記念事業のひとつとして新本社ビル（現あいおいニッセイ同和損保フェニックスタワー）の建設と同時に、同ビル内に社会貢献活動の拠点として1995年（平成7年）5月13日に誕生した。また音楽アドバイザーとして今井信子氏（ヴィオラリスト）、伊東信宏氏（大阪大学教授）、渡邊規久雄氏（ピアニスト/武蔵野音楽大学教授）を迎え、クラシック音楽をメインに小ホールの特性を最大限に生かしたユニークなプログラムを企画、良質な音楽を手軽に親しみやすく発信するとともに室内楽ホールとして市民に開放することで芸術・文化の振興をはかることを基本方針としている、との説明があった。

その後、館内の案内をしていただいた。館内には様々な絵画や彫刻が飾られており、これらの多くは楽器やオーケストラといった音楽に関する作品だと説明を受けた。また扉や照明のデザインも高級感があり、気品に満ちた空間となっていた。

次に、貸館事業についての説明を受けた。ホールの方針として、基本的にプロに限って貸していることを知った。また実際に貸館申し込みに必要な使用計画書を書き、使用楽器や機械、演出の確認をした。この計画書から当日必要となるスタッフや公演本番の演出が決まるため、演奏者とのコミュニケーションが大切だというお話を伺った。

午後には機関紙「サロン」についての説明を受けた。「サロン」は年に6回、奇数月に発刊しており、インターンシップ当日は11月冬号の調整中であった。内容としては巻頭に主催公演のインタビュー、そして発売公演情報、協賛公演情報、いちおし公演情報が並び、最後は演奏家に依頼したエッセイが続く。スケジュールとしては発刊の2か月前にページ割、内容の検討、1か月前から1か月半前に掲出原稿締切、その後3週間程度で校正から校了、発刊月の第2週目には納品、とのことだ。多くの人の目に触れる機関紙という特性上間違いは許されないため、文章の校閲には非常に気を使っているというお話があった。

最後に、自主企画事業について説明を受けた。自主企画事業では客層を絞り込み、趣向を凝らしたシリーズ性を採用している。国内外で活躍する世界トップレベルの演奏家を招く注目アーティストシリーズ、午後のひとときにお茶やお菓子とともに音楽に接していただくティータイムコンサートシリーズの他、メセナ活動の中でも社会的貢献の高い企画であるレクチャーコンサートシリーズや発表の機会に恵まれない演奏家に無料でホールを提供するエヴォリューションシリーズ等計7つのシリーズが挙げられた。現在はティータイムコンサートシリーズが一番人気となっているが、他のシリーズでも多くの人、特に若い人を呼び込みたいというお話を伺った。ただ、ここで難しいのは社会貢献活動の一環というザ・フェニックスホールの立ち位置である。聴衆の耳を育てるために、なじみのない音楽を含む企画も必要だと考えているが、ある程度の集客・収益も必要である。ここにホールの方々の苦悩が見られた。また親会社があいおいニッセイ同和損保であるために SNS の活用の許可が出ず、その点も苦労しているというお話があった。そしてお客さんを集めるための現在の取り組みについてのお話を伺い、インターンシップ1日目が終了した。

〈第2日〉

まず、著作権についてのお話をうかがった。演奏会を行う際には日本の著作権協会に演奏会申請をする必要があるため、曲目、演奏時間、演奏者などを記録しているそうだ。演奏するのに許可が必要な曲があったり、編曲の場合にも申請にお金がかかってきたりする。このように楽曲の著作権はもちろんのこと、チラシに関係するお話も多かった。例えばチラシに写真を使用する場合はコピーライトが必要かを確認しなければならず、またチラシのデザインは松井先生という方に頼んでいるために複製することができなかつたりする。また、演奏会そのものについても、奏者の方に録音・録画の許可を取ったりするそうだ。

次に、友の会についてのお話をうかがった。友の会には現在980名ほどの会員がおり、そのほとんどがシルバー世代だそうだ。HPのリニューアルによって40代、50代の会員が増えてはいるが、依然として高齢者が中心であり、これを危惧されていた。最近では、演奏会後のアフタートークなどで奏者との触れ合いの場を設けたり、CD販売とセットでサイン会を開いたりして、積

極的にお客さんにサービスを展開しているようだ。また、友の会のパンフレットにはなるべく会員になるためのハードルが下がるような工夫がしてあり、そのまま送れる申込書や、会費などの自動引き下ろしの案内はその一環だろう。会員になって最終的にはチケットを買ってもらうのが目的なので、少しわかりにくい公演などは、広報誌「サロン」にインタビューを取り上げるなどして積極的に呼び込みをしている。チケットの発売も友の会会員優先で、友の会会員は金曜日解禁、メール会員には月曜日解禁、一般の方には火曜日解禁だそうだ。個人情報の管理は外部に委託している。メール版友の会である E-PHX はまだあまり認知されていないようで、チラシには必ず友の会の情報を載せるなどの工夫がなされていた。

続いてチケット業務についてのお話をうかがった。ザ・フェニックスホールのチケットセンターは比較的小規模であり、実際に開いている時間は平日の 10:00～17:00 と長いとは言えない。チケットシステムも電話を取りながら残席確認をするもので、割とアナログである。一方で、チケット管理を行っている方は、お客様とのかかわり方をとても大切にされていた。ザ・フェニックスホールに足を運ぶ方は音楽に造詣の深い方が多く、尊敬の意を持って対応したいとおっしゃっていた。その証拠に、お客様情報の中にはその方の席の好みなども細かに記録されていて、チケットセンターとのコミュニケーションを大切にされているお客様もいらっしゃるという話はとても印象的だった。

その後昼食をはさんで HP のお話をうかがった。HP は外注しており、デザインについてはそこまで自由はないそうだ。あくまでも保険会社の HP であるということが大きく関係しているようだ。HP を作っている方は他にも就活についての話をしてくださった。この方は以前オーケストラ事務局にいらっしゃったようで、音楽に関わる仕事について教えてくださった。このお話を通して、枠の狭さやその専門性から、クラシック音楽に従事することがいかに難しいかを改めて認識した。

その後は次の日のチラシ挟み込み作業を行ったのち、リハーサル見学をした。郷古さんと加藤さんはとても仲が良く、リハーサルはとても楽しそうだった。

〈第3日〉

まず 1F 受付の設営をした。ポスターの張替えや受付代設置をした後、リハーサルの見学をした。その後、レセプション最終打ち合わせを見学した。ここではチケットの扱いや開場・開演時間のほか、物販場所や遅れてきたお客様の対応など細かく確認していた。そして打ち合わせが終わると、開場見学・プラカード入れ見学をした。ここで初めてお客様を目にしたが、お客様の大半は年配の方であり、これまで多くの職員の方が話していた若者の呼び込みという課題を目の当たりにした。その後コンサートの前半はホールの中で見学し、後半は舞台袖で奏者に飲み物をお出ししたり、ステージマネージャーが演奏時間を記録するのを見学したりした。

終演後はお客様のお見送りをした。サイン会には長い列が並び、お客様と出演者の交流を目にすることが出来た。お見送り後は片付けをし、アフタートークの開場へ向かった。アフタートークとは大阪大学大学院文学研究科「徴しの上を鳥が飛ぶ」というプログラムの一環で、受講生と奏者が演奏会について語り合うものである。今回は非公開で行われ、約20名の受講生が参加していた。アフタートークでは奏者に対して今回演奏した曲目から郷古さんと加藤さんの経験、そしてこれからの展望まで、多岐にわたる質問が寄せられ大いに盛り上がった。アフタートーク後はこれまでお世話になったホールの方に挨拶をし、3日間のインターンシップが終了した。

【全体の感想】

今回のインターンシップを通して感じたことが二つある。一つ目は、どのような演奏会を開催するのが良いのかということ、二つ目はホールで働くのは簡単なことではないということだ。

まず一つ目についてだが、アドバイザーとホール側の関係から考えてみた。ホール側からすると、やはりどんな演奏会でもホールに来ていただくのが一番だ。そのためには、有名な曲を有名な演奏家が演奏すればよいだろう。しかし、ホールの方はそれだけではいけないのではないかと危惧されていた。演奏を聴く側のリテラシーというものは演奏会を開催する側が育てていくべきものだし、リテラシーがある人はいつか現在のような決まりきったプログラムに飽きてしまうだろうということだ。ホール側としても新しいものを入れていきたいが、何が今の聴衆には必要で、本当に面白い物とは何なのかという問題を解決してくれるのが、伊東先生をはじめとするアドバイザーの方なのだという。今回の「土と挑発」は伊東先生が提案したもので、今井信子先生は、来年の冬に世界的にとっても有名な若手のヴァイオリストを連れてきてくれるという。提案された演奏会はそのままで集客が見込めるものは少ないが、そこはホール側が何とかするべき問題だと考えていらっしやった。お客様の新しい扉を開くための面白い演奏会をアドバイザーの方に提案していただいて、それをホール側がお客様に伝える、このような構図でお客様のリテラシーを育てたいということがお話から伝わってきた。

二つ目については、やはりザ・フェニックスホールが保険会社のメセナ活動の一環であるというところが働きづらさを生む原因になっているのではないかと考えた。SNSは使うことができないうし、HPやチラシを制作する際にも、あくまで保険会社が運営しているのでそこまで自由に制作することはできない。ホールの方々、自分のやりたいことをのびのびやっているというよりは、重い制約の中で淡々と仕事をこなしているイメージの方が強かった。このように、厳しい制約が課される中でも、ホールの方々を持っている思いや感性がよりうまく発信していけるような環境がもっと整ったら素晴らしいと感じた。

京都コンサートホール インターンシップ報告

文学研究科 音楽学研究室 博士前期課程 音田 真陽・佐藤 馨

【研修先】

京都コンサートホール（京都市左京区下鴨半木町 1-26）

【研修期間】

2019 年 11 月 27 日（水）～11 月 29 日（金）

【ホール概要】

京都市による世界文化自由都市宣言の具体化事業及び平安建都 1200 年記念事業として、1995 年に完成した。建築設計は磯崎新アトリエが、音響設計は永田音響設計が担当。大ホールとアンサンブルホールムラタ（小ホール）の 2 つのホールを擁する京都最大級のコンサートホールであり、京都市交響楽団の本拠地でもある。シューボックス型の大ホールには総ストップ数 90、パイプ総数 7155 本のドイツ・ヨハネスクライス社製の国内最大級のパイプオルガンが設置されている。

大ホール

オーケストラ主体のクラシック音楽の鑑賞・演奏に最適なホールとして設計されている。

席数：1 階 980 席・車いす用スペース 6、2 階 453 席、3 階 400 席

総席数 1833 席＋車いす用スペース 6

アンサンブルホールムラタ（小ホール）

室内楽・リサイタル等、小編成のクラシック音楽の演奏会や、合唱・ピアノ発表会を主な対象として設計されている。

席数：510 席＋車いす用スペース 4

【研修内容】

第一日目 11 月 27 日（水）10：15～17：00

- ① インターンシップ概要説明
- ② ホール案内
- ③ 記者発表の手伝い・見学
- ④ 事業企画課の業務内容紹介

第二日目 11 月 28 日 (木) 12:00~17:00

- ① アウトリーチのリハーサル見学
- ② DUO GRANDE アウトリーチ・プログラムの視察
- ③ 翌日公演のチラシ挟み込み

第三日目 11 月 29 日 (金) 10:00~17:15

- ① 公演「おんがくア・ラ・カルト Vol.32」の準備手伝いと鑑賞
- ② 企画制作に関して
- ③ 企画を立ててみよう

【期間中の公演概要】

公演名：おんがくア・ラ・カルト ♪第 32 回「聞かせてよ、愛の言葉を」

場所：アンサンブルホールムラタ (小ホール)

日時：11 月 29 日 (金) 11 時開演

料金：500 円 (全席自由)

出演・曲目：谷村由美子 (Sop)、宋和映 (Pf)

アーン：クロリスへ

プーランク：ヴァイオリン

プーランク：愛の小径

マスネ：歌劇「マノン」より「さようなら、私たちの小さなテーブルよ」

グノー：歌劇「ファウスト」より「宝石の歌」

ルノワール：聞かせてよ、愛の言葉を

コスマ：枯葉

山田耕筰：赤とんぼ

小林秀雄：落葉松

サティ：あなたが欲しい (アンコール)

主催：京都コンサートホール (公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)、京都市

後援：村田機械株式会社

【研修内容報告】

〈一日目〉

○インターンシップ概要説明とホール案内

午前中に京都コンサートホールの事務室に集合し、まず事業企画課の高野さんにお会いしてから、事務室にいる事業企画課・管理課スタッフの皆様に挨拶と自己紹介をさせていただきました。

高野さんから今回のインターンシップについて三日間の流れなどの簡単なオリエンテーションを受け、そこからは管理課の薩摩さんが引き継いで京都コンサートホールの施設概要の説明をしてくださった。その後、実際にホールの施設見学をして、この時は幸いにも大ホール小ホールともに利用がなかったため、楽屋から舞台の上まで満遍なく見学させてもらえた。

大ホールは特にオーケストラに適した音響と構造を保持している。ステージには通常は人力で組まねばならないひな壇が予め組み込まれ、スイッチ操作によって舞台が盛り上がりひな壇がせり上がる仕組みになっており、オーケストラ演奏が念頭に置かれていることが分かる。また大ホール設置の国内最大級のパイプオルガンも弾かせていただくことができ、あの巨体の中に入って内部構造も見せていただいた。室内楽やリサイタルなど小規模編成での使用に最適化されたアンサンブルホールムラタは、特徴的な六角形構造を有しているが、それは近未来的な宇宙船の内部がイメージとなっているものだそうで、それは照明などの意匠にも及んでいる。このような世界観の表出によって、音響面のみならずホール内の一体感が醸し出されている。こうした建築的な意匠は建物全体にも及んでおり、とりわけエントランスロビーに配された十二支を元にしたオブジェが示すように、建築設計を請け負った磯崎新氏が影響を受けた風水の考え方がこの建物全体を統一している。施設見学の最後にはピアノ収蔵庫にも案内してもらった。ホールが所有する数台のピアノに加え、チェンバロ 1 台も共に収蔵されており、徹底した温湿度管理によって楽器が良好な状態に維持されているのがわかった。

○記者発表の手伝い・見学

この日は外部のプレス向けに、京都コンサートホールの 2020 年度自主事業ラインナップの記者発表があり、私たちはその手伝いとして、来館された記者の方を会場にご案内したり、お名前を伺って出欠をチェックしたりという仕事をさせてもらった。開始時間の少し前には、記者席後方に移動して、記者発表の様子を見学した。もちろん一般には公開などされていないので、かなり貴重な現場に立ち会うことになった。プレゼンターは高野さんが務めたが、プレス用の資料と照らし合わせて発表を聞いていると、強調したい情報や魅せるポイントを的確に押さえながら話されていることが分かった。2020 年の東京オリンピックやパラリンピックにあわせて「平和」をキーワードとしたり、またベートーヴェン生誕 250 年にちなんだイベントを組んだり、時世との照応も欠かさないのが外部一般にアプローチする秘訣だろう。

○事業企画課の業務内容紹介

記者発表見学の後は、事業企画課の業務について事業企画課の皆さんからお話を伺った。事業企画課と管理課の業務の違いを確認した後で、予算や財源、収支管理や指定管理者制度などについて、広範なお話を聞くことができた。特に事業企画課の佐藤さんが仰っていた、目利きならぬ

「耳利き」の力を育てることの重要性は、例えば将来性豊かな才能にいち早く目を付けることや、あるいは自分の選好に左右されず聴衆のニーズを掴むことに、大いに役立つという点で感心させられた。そのためには生演奏を聴く機会を多くすることだといい、未だに研鑽を怠らないその姿勢には、人生の仕事として演奏会の企画に携わる人の生き様が深く感じられるようだった。

〈二日目〉

○アウトリーチ事業について

京都コンサートホールでは、2019 年度より『Join us! ～キョウト・ミュージック・アウトリーチ～』が実施されている。この事業は、さまざまな理由で京都コンサートホールや文化会館にご来館できない方や、クラシック音楽に接する機会の少ない方などに、クラシック音楽の喜びや楽しさを生演奏として届けるものである。

主な目的として、次の二点が挙げられている。

- ① 音楽芸術に触れる機会の少ない一般市民に対して生演奏を提供し、文化・芸術を知域に広く普及させると同時に「未来の聴衆」を育成する。
- ② 若手音楽家の演奏機会を「アウトリーチ活動」として増やしていくことで、京都の芸術家たちの活動を応援する。

上記の②にあるように、京都にゆかりのある若手新進音楽家を「京都コンサートホール登録アーティスト」として起用し、京都にある教育機関や福祉施設でアウトリーチ活動を展開している。登録アーティストは、2ヶ月間にわたって事業アドバイザーの児玉真氏（一般財団法人「地域創造」プロデューサー）や京都コンサートホール職員と共にアウトリーチ・プログラムを作成し、演奏会の進め方の研修を受ける。事業実施期間は2年間で、1年あたり10回程度のアウトリーチ活動に加え、成果披露として年1回のジョイント・コンサートの場が設けられる。

2019 年度の登録アーティストは、田中咲絵氏（ピアノ）、石上真由子氏（ヴァイオリン）、DUO GRANDE 上敷領藍子氏（ヴァイオリン）と朴梨恵氏（ヴィオラ、ヴァイオリン）である。

アウトリーチ・プログラムは、演奏（20～30 分）とクラシック音楽に関するお話（15～25 分）の 40～45 分で構成される。登録アーティストは、1年目となる 2019 年度は小学校を中心に活動している。

○11/28 実施のアウトリーチ概要

- ・施設名：光華小学校（京都市右京区西京極野田町 39）
- ・実施時間：11/28（木）5 限 45 分間（13：45～14：30）
- ・演奏者：DUO GRANDE 上敷領藍子氏（Vn）、朴梨恵氏（Va）
- ・対象：第5学年2クラス 57 名、担任の先生 2 名

- ・必要備品：譜面台1台、長机1台、学生机1台、移動式黒板1枚、アーティスト用お茶
- ・付き添いのホール職員：高野さん、藤川さん
- ・プログラム

バルトーク：44 のデュオから第 35 番

ラハナー：ソナチネより第 1 楽章

モーツァルト：歌劇「魔笛」から第 1 幕第 6 曲「テルツェット」（かわいい人よ、こっちへ来い）

モーツァルト：歌劇「魔笛」から第 2 幕第 13 曲「アリア」（恋すればだれでも楽しいものだ）

モーツァルト：歌劇「魔笛」から第 1 幕第 2 曲「アリア」（私は鳥刺しでござる）

モーツァルト：デュオ k. 423 より第 1 楽章

ボウエン：デュオ第 3 曲

マルティヌー：二重奏曲第 1 番 H. 313 「3つのマドリガーレ」より第 1 楽章

○アウトリーチのリハーサル見学

二日目は光華小学校に集合し、まず DUO GRANDE のリハーサルを 1 時間ほど見学させていただいた。全体の流れを学校側と確認しつつ、特に学校の先生がパパゲーノ役になって演奏に加わる箇所などは念入りに打ち合わせていた。元々予定されていたプログラムは少し違ったのだが、リハーサル後に DUO GRANDE のお二人がプログラムを上記のように変更した。話の流れを考慮し、曲の順番を入れ替えたり、曲自体を変更したりしていた。毎回同じプログラムを準備していても、その時々アイデアによって柔軟に構成を変更する過程は非常に興味深く、聴き手に対して常によりよいものを提供する姿勢が見られた。

○DUO GRANDE アウトリーチ・プログラムの視察

児童が着席すると演奏会が始まった。小学生に対する話し方が徹底されていて、難しめの内容も丁寧にかみ砕いて説明されていた。児童との距離が近い空間だったので、演奏者の働きかけに児童が気軽に答えるなど、両者のコミュニケーションもうまく取られていた。担任の先生が役者として登場する場面は、児童が想定以上に盛り上がり、それを抑えるのに苦心している様子も見られたが、児童もリコーダーで演奏に参加したりヴァイオリンの中をのぞいたりすることで、受け身にとどまらない双方向の演奏会だった。ホールでの演奏会のような舞台と客席の隔たりがなく、演奏者も私服で親しみやすいため、児童にとっては演奏家を身近に感じることができる良い機会だろう。今回、リハーサルからを見せていただいたことで、打ち合わせでの気付きを本番で

どのように反映させるのかを間近で観察できた。また、MC によって、プロの演奏家が何をどういう意図をもって子どもたちに伝えたいかがよく分かった。演奏家が自分の伝えたいことをそのまま演奏会で伝えられることはそう多くないであろうから、このアウトリーチ事業が、児童にとってだけでなく、演奏家にとっても貴重なものであることを実感した。

○翌日公演のチラシ挟み込み

演奏会終了後は、高野さんとともに京都コンサートホールに戻り、明日の公演で配布するチラシの挟み込み作業をお手伝いした。8人ほどで30分かけて300部程度を挟み込んだ。挟み込み作業をしたことがないわけではないが、これだけの枚数を公演の度に挟み込むのかと考えると大変骨の折れる作業だと感じた。

〈三日目〉

○公演手伝いと鑑賞

三日目はコンサートホールの最も基本的な業務である演奏会が実施される日だった。この「おんがくア・ラ・カルト」は京都コンサートホールが主催するものとして長く回を重ねてきた企画であり、この回が32回目であった。私たちは開場前からホールそばのデスクに待機して、来場者の予約番号を確認してチケットと引き換えたり、取り置きされていたチケットを引き渡したりした。平日午前のコンサートというとなかなか人が集まらなそうイメージだったが、私たちがホールに到着するとすでに会場前には長蛇の列ができていた。「おんがくア・ラ・カルト」はこの回も含めてチケットが完売となる場合が多らしく、もはや京都コンサートホールの看板企画としての位置を占めていることが分かる。平日午前だと学生や社会人は来場できないので自ずとターゲットは絞られてくるが、実際の来場者層を観察するとご年配の方が大半であり、それでほぼ毎回チケットが完売になっているということは、想定している聴衆と実際にアピールできている層がしっかり噛み合っているということだ。加えて500円という比較的安価な料金設定や、一時間程度で終わるというコンパクトなボリュームも、クラシックコンサートへの足の運びやすさを手助けしている。もしこれが1000円で90分のコンサートだったら完売にはならないだろう。開演前にホール内に入り、そのままコンサートを丸ごと鑑賞した。休憩はなしだが、演奏者お二人と司会の高野さんが時折トークを挟みつつ、曲自体も短いものが多かったのだから、あっという間に感じられた。一時間とはいえ、500円でこうした良質な音楽体験ができるのだから、リピーターもできるはずだと人気に納得ができた。途中、後方に座っていたお客さんが体調を崩して退出する場面もあったが、もしかしたら年齢層ゆえにこのような事態は常に考慮されているのかもしれないが、スタッフが迅速に対応したおかげでコンサートの流れが妨げられることはなかった。終演後はお客さんがあらかたお帰りになったのを確認して、後片付けを手

伝って事務所に戻った。

○企画制作に関して

午後は、事業企画課がやっているような企画立案をすることを目標に、まず高野さんから企画制作に関するお話を聞いた。西洋音楽史上最初期のプロデューサーとしてメンデルスゾーンが挙げられ、彼が備えていた「ビジネスに対する理解」や「資金調達能力」、さらに「マーケティング能力」や「目利きの能力」などを指して現代のプロデューサーにも必要な要素だと教えていただいた。企画制作の出発点となるのが企画書作成である。企画を立てるに至る要因（5W1H）をおさえ、見積もられる収支から予算を提案し、出演者とプログラムを決定することで公演の輪郭を描き出す。さらに高野さんは、公演名が企画の「顔」だとすれば、公演のキャッチコピーは企画の「洋服・アクセサリー」であると、一見すると本質的でないようにも思ってしまう部分がいかにコンサートのアピール力に繋がるかを説明してくださった。

○企画を立ててみよう

企画制作について説明を受けた後は、研修者が企画立案に挑戦し、それをプレゼンすることになった。「京都コンサートホールで、アマチュアから専門家まで楽しめる公演を企画してみてください。大ホール/アンサンブルホールムラタのどちらを使っても構いません。スケジュールや予算も考慮に入れません。ジャンルはクラシック音楽とします。」というお題のもと、高野さんが企画制作について教えてくれたことも考慮しながら、60分ほど時間をもらって各々が企画を考えた。音田はピアノという楽器の発展に注目してベートーヴェンとリストを聴き比べる趣旨の演奏会、佐藤はストラヴィンスキーの『兵士の物語』を材料にステージと客席の垣根を取り払うような演奏会を企画し、簡単な企画書の形式にしてまとめた。その後、二人がそれぞれ自分の企画書を元にして、事業企画課の方々に対して自身の企画をプレゼンした。好意的な意見もある一方で、料金設定が妥当か、出演者を探せるかどうか、そのプログラムが果たして面白いのか、広報戦略の立てづらさ、などの面について質疑や提案をしていただいた。京都コンサートホール並みの規模の大きな公演を企画するとなると、集客や収支の問題、出演者の選定など、越えなくてはならない課題のスケールがはるかに大きく感じられ、これらの壁を乗り越えていく事業企画課の皆さんの力を思い知ると同時に、ようやく初日に事業企画課の佐藤さんが「私たちは言うなれば『プロ』として企画に携わっている」と仰っていたことの意味を汲み取ることができた。

【三日間全体の感想】

私はこれまで多くのコンサートに訪れたことがあり、演奏者としてコンサートに出演したこともあるため、コンサートホールはいつも身近な存在だ。特に京都コンサートホールは、私の師

事する先生との出会いのホールであり、大変思い出深い場所である。ただ、これまでは出来上がったコンサートの表面部分しか知らなかったのだが、今回普段は直に接することのない事業企画課にお邪魔させていただいたことで、コンサートを一から作るということの責任の大きさや魅力を知った。特に企画を立てることの一端に触れたことで、今後公演のチラシや内容を見る目が変わりそうだ。

事業企画課のみなさんは、現状に甘んじるのではなく、貪欲に新しいことを求めていらっしやう。これからの時代、人々の心にはどのような音楽の需要があるのだろうか。京都コンサートホールの答えを追い続けていきたい。(音田)

学部時代から京都で下宿をしていたため、京都コンサートホールには何度も足を運んでコンサートを鑑賞したり、時には演奏会スタッフとして簡単な仕事をしたり、場所としては身近に感じていた。しかし私たちが普段目にはいるのはあくまでもコンサートホールの表側である。裏ではどんなスタッフが、それぞれどんな仕事を担っているのか、それは内側に入ってみないと分からない。今回の研修では、3日間でホール事業のそれぞれ異なる側面(記者発表、アウトリーチ、ホール公演)を見ることができた。外部のメディアへの情報発信はもちろん、在野の若手に支援するとともに一般大衆のクラシック音楽への親しみを広げ、本分であるコンサート企画・運営も抜きなくこなす。常にいくつもの事業が並進している。ホールはコンサートをやる場所だという常識的な認識だと抜け落ちてしまいがちだが、今回のインターンシップで強く思い知らされたのは、すでにコンサートホールの活動範囲は広く地域社会へと伸びており、また活動領域もコンサートのみならず未来の音楽文化を支えていく人々への教育普及活動に乗り出しているのだということである。聴衆という視点からだと、コンサートという一過性の出来事のうちに私たちはホールという場を置き去りにしてしまいがちだが、むしろホールはこれからの「未来」の音楽文化へと常に目を向けている存在なのだということが理解できた。(佐藤)